

## アート・ドキュメンテーション学会 第10回秋季研究集会要旨

### 【企画セッション／招待講演・パネルディスカッション】

#### ■「音楽学における研究図書館とアーカイヴ」

図書館は、わが国では一般に総合図書館を意味する。しかし、ヨーロッパの図書館はむしろ、さまざまな主題領域に即した研究図書室 (research library, Forschungsbibliothek) から成立したと考えるべきだろう。古くからの医学ほか自然科学系の研究図書室、法学図書室、あるいは神学を主題とする修道院図書室をあげるまでもなく、とりわけ19世紀以降は、芸術を対象とする研究図書室＝研究アーカイヴが成立する。周知のザルツブルクの「モーツァルテウム」(1841年)の図書室はそのひとつである。

こうした研究図書室＝研究アーカイヴでは、いわゆる公文書を選別・登録し運用する公文書アーカイヴとは異なり、作品の成立や受容に関する多様な資料群を文献学ほかの史料批判にもとづいて整理・究明してゆく。とくに音楽領域では、楽譜の校訂をはじめ、楽器研究、演奏史、批評史などの研究も展開する。なぜなら、図書としての文学作品や実在物としての美術作品と異なり、そもそも音楽作品とは、そのつど演奏の場に生起するひとつの出来事であり、解釈だからである。

このセッションでは、音楽史・音楽学の専門家を迎えて、音楽作品をめぐる豊かな研究の現場としての図書館／アーカイヴのありようを考えてみたい。

#### ■林淑姫 (旧日本近代音楽館主任司書・事務局長)

##### ・音楽資料と図書館、アーカイヴ、ドキュメンテーション

創作、演奏、享受(聴衆)論を基盤とする音楽史研究にとって、出版物以外の手稿譜(自筆譜、スケッチ、他者による浄書譜などを含む)や原稿、文書類、および演奏会プログラムなど所謂「音楽のエフェメラ」とよばれる資料群が重要な資(史)料となる。これらの資(史)料の保存と整理には出版物と異なる方法—資料分析が必要である。創作についていえば、音楽作品の発表は演奏による。初演時の楽譜は手稿であり、その後幾たびかの改訂を経て初版譜として定着するのが一般的である。したがって手稿譜(自筆譜)は作品の生成を語る最重要資料だが、その過程で派生する演奏会プログラムや私的ライブ録音、批評などもまた追跡対象である。日本の音楽図書館は従来出版物(書籍、楽譜、雑誌、視聴覚資料)によって蔵書を構成してきた。しかし成熟した音楽活動の重層的な展開と歴史の形成は新たな観点を要請している。

#### ■平野 昭 (静岡文化芸術大学名誉教授・元慶應義塾大学文学部教授)

##### ・メディアとしての編曲版と作品としての編曲版～ベートーヴェン作品を例として

19世紀までの音楽を研究対象とする場合、作品は楽譜という記号の解読、解釈(演奏を含む

interpretation) を通してのみ知ることができる。録音、放送メディアのなかった時代に音楽を享受するという事は生の演奏を聴くことであった。19 世紀前半までのオーケストラ演奏会の主要な開催目的は新作発表であり、ドイツ圏ではアカデミーと呼ばれる受益コンサートを作曲家が主催することが普通であった。つまり、多くのコンサートが初演作品を中心としてプログラミングされており、この初演の場に居合わせたごく限られた聴衆だけがその作品を享受できたのである。初演後に作品は楽譜として初版出版されるが、交響曲や協奏曲のようなオーケストラ作品の初版譜は概ねオーケストラ・パート譜（各楽器の演奏譜）の束であり、これを購入してもオーケストラが無ければ音楽として鳴り響かせることはできない。そこで作品普及の手段として編曲版が作成されたのである。オーケストラ音楽をピアノ 1 台で、あるいは 2 台で演奏するものを基本とし、ピアノ三重奏版、管楽五重奏版、管弦七重奏版、管弦九重奏版等々さまざまな室内楽編成による編曲版が、初版譜を出版した出版社を中心として各社から出版されるのが一般的であった。そうしたさまざまな編曲版は多くの場合、出版社専属の編曲者（とは言え、ほとんどの場合、作曲家として知られた実力者への出版社からの依頼に応じた者であった）によって作成され、作曲者の許可を得ることの方がまだ少なかった（作曲者に無断で作成される場合が多かった）。

こうした編曲版は明らかに作品普及に大きな効力を発揮した。しかし、こうした編曲版に原曲の作曲者が満足することは少なかった。L. v. ベートーヴェン（1770～1827）は編曲版作成に対する明確な姿勢と主張を示す言葉を残している。要約すれば、「モーツァルトやハイドンの作品を編曲できるのは作曲者本人だけであり、自分の場合も同様である」「編曲に際しては原曲からどこを省略、削除し、どのように補うかが非常に難しい」のであり「それが可能なのは本人だけだ」といった主旨の書簡を残している。

ベートーヴェン自身は自作を編曲することは決して多くはなかったが、例えば、交響曲第 2 番のピアノ三重奏版（ピアノとヴァイオリンとチェロ）やピアノ・ソナタ作品 14-1「ホ長調」の弦楽四重奏版「ヘ長調」などは単なる編曲版ではなく、「新たなオリジナリティーを獲得した」自律した作品と見なければならぬだろう。

時空に鳴り響いている間だけ顕在する音楽作品は、しかしながら、楽譜という記号の形で伝承されている。音楽の社会学的研究や受容史研究が注目される中、オリジナルとさまざまな編曲版という楽譜資料のドキュメンテーションがますます重要になってきている。

## 【一般セッション】

■ [発表 1] 和久井 遥 (東京国立博物館学芸企画部博物館情報課情報管理室アソシエイトフェロー)

### ・ 散発的にデジタル化したデータの管理手法について

多様な記録メディアが普及していく中、博物館などでも日々の業務・研究で様々なデジタルデータが作成され、記録メディアに格納・蓄積されている。それらの中にはコンテンツ作成などの

単発業務・研究で作成された散発的データや、他所で作成されたデータのコピーなど、体系的に管理されていないデジタルデータも少なくない。しかし組織内に散在する記録メディアは放置されがちであり、内容を把握している職員も少ない。本発表では、組織内に散在する記録メディアを把握して適切に記録をとり、長期的な保存にむけて管理する手法について提案する。

■ [発表 2] 竹内俊貴 (九州国立博物館学芸部文化財課アソシエイトフェロー)

・文化財情報システムを活用したウェブサイトでの情報公開と課題

九州国立博物館では平成 28 年度に当館所蔵品の検索システムをウェブサイトで公開し、平常展の陳列品リストページをリニューアルした。既存の館内システムを利活用することで情報公開・修正に係る新規作業を極力減らしつつ、利用者に提供するサービスの向上を実現している。本ウェブサービスが、情報の発生源である学芸と外部から問い合わせを受ける事務との情報共有を円滑にしている観点から、博物館内の業務を媒介するシステムの役割および公開情報の活用について報告・検討する。

■ [発表 3] 齋藤歩 (学習院大学大学院人文科学研究科アーカイブズ学専攻博士後期課程)

・建築レコードと著作権法：日本における権利制限に着目して

建築生産プロセスで作成される建築図書（図面や契約書等）は、建築分野のアーカイブズ活動の中心となる資料であり、著作権法により設計者の著作物として位置づけられる。日本で設計業務にともない締結される契約では、設計者のこうした著作権を、建築主が部分的に制限することがある。その目的は、建築図書の利用や譲渡に建築主の意向を反映させることによって、建物の複製等を防ぐことにある。しかし、このような契約が、アーカイブズ機関が設計者から建築図書を受け入れる際に、寄贈・寄託や利用を難しくする場合がある。本研究では、以上のような建築分野の著作権に関する法的課題について、日米比較により検討し、日本で建築アーカイブズが実現するために必要なポイントを整理する。

■ [発表 4] 寺師太郎 (凸版印刷株式会社文化事業推進本部技術開発部)

・デジタル画像のリファレンスについて

写真がアナログからデジタルに移行して 15 年程が経つが、肉眼で直接「色」を確認することが不可能なデジタルデータの「色」をどのように担保すればよいのか。デジタルアーカイブ、文化財写真や記録写真を撮影する上で、どのようなリファレンスを残すことが必要なのか。メタデータとしての環境情報、デジタルカメラの分光特性とその取得から活用の可能性について、国宝銅像阿弥陀如来坐像の文化財修理国庫補助事業における記録写真を例にして考える。

■ [発表 5] 金子貴昭 (立命館大学アート・リサーチセンター)

山路正憲 (立命館大学アート・リサーチセンター)

・テキストアノテーションシステムによる歴史資料(文献)の有機的活用—江戸期出版記録

## を事例として

現在、立命館大学アート・リサーチセンターでは、テキストアノテーションシステムの開発を進めている。本発表では、江戸期の出版記録テキストアーカイブを事例として、当該システムの有効性について検証するとともに、関連する既存データベース（古典籍・板木等）と連携させることによって、その可能性を提示する。また、wiki システムとの連動などによる、構築から活用までを見据えたテキストアーカイブシステムとしての将来像も示したい。

### ■ [発表 6] 赤間亮（立命館大学アート・リサーチセンター）

#### ・ R. Keyes, P. Morse 編「北斎版画作品カタログレゾネ」WEB 公開システムとシステム環境

当該カタログレゾネは、ピータ・モース、ロジャー・キーズ両氏の編になる 90 冊にも及ぶ分厚いファイルにまとめられた研究成果である。収録作品数は 3969 作品とそれほど多くはないものの、商業複製物として「大量」に残る浮世絵版画をできる限り実見し、「摺順や異版」について詳細に判定を加えている。こうした極端に高められた専門性をシステム上で融合実現させた「版画」のオンラインカタログレゾネは現状では存在しないようである。本発表では、「木版画」のカタログレゾネを Web 上で効果的に表現する前提としての Web 環境について論ずる。